



お茶って、な～に

チャ節 (Section Thea)
チャ (*C. sinensis* (L.) O. kuntze)
 中国種 (*C. sinensis* var. *sinensis*)
アッサム種 (*C. sinensis* var. *assamica*)
 ツバキ節 (Section Camellia)
 サザンカ節 (Section Paracamellia) 等 11節

ツバキ属 (genus *Camellia*)

ツバキ
サザンカ

チャが他の植物と異なる点

- ☆カフェイン
- ☆ガレート型のカテキン
- ☆テアニン
- ☆その他(フッ素、アルミ等)

チャはツバキの仲間、でも飲用されるのは茶樹だけ

お茶の始まり HPより引用

お茶を飲んでよかった

神農
西暦500年前後に陶弘景(452-536)がまとめた『神農本草経』に「神農嘗百草、日遇七十二毒、得茶而解之」

達磨和尚
修行のとき、眠気を覚ますため、まゆげをそぎ落としたのが湯に入り、お茶になったと言われる。

お茶の別名はめざまし草

日本にも仏教とともに伝来し、文化的にも大きく育ててきた

お茶の原産地は

植物としてのチャの原産地
茶樹の原産地は中国西南地区

茶の文化(利用)のはじまり
茶の文化は蜀の国(四川省成都付近)で漢民族により発展した

茶の古い文字
 茶(と)、檟(か)、葢(せつ)、茗(めい)等
 紀元前59年中国漢時代に王褒が書いた「僮約」という文章の中に「茶を煮る。茶を煮る」。
 茶文字に変わるのは唐時代

巨大な茶樹ははしごをかけて摘む

茶は羹(スープ)として飲まれていた

お茶は薬草だった?

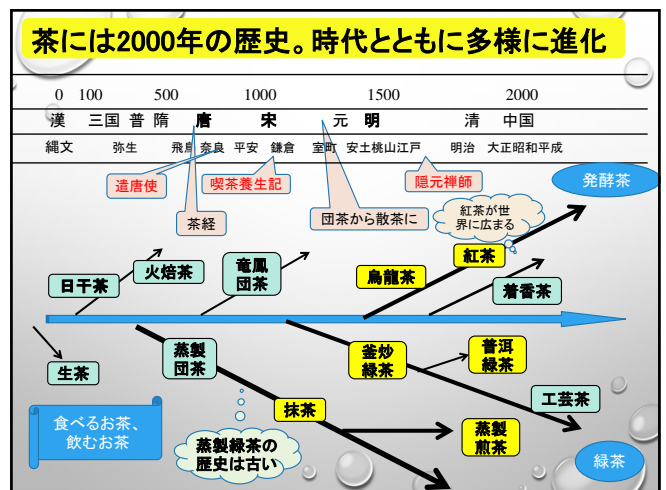
薬草 → 嗜好品

最古の薬書 (後漢1~2世紀)
神農本草経
 Wikipediaより引用

茶は上薬
 陶弘景は「神農本草経集注」により苦菜を茶とした

茶の味は味は苦く、性質は寒。効能は五臓(肝、心、脾、肺、腎)の病氣、食へ過ぎによる胃もたれを治し、長く、老用すれば氣分を安らかにし、元氣をまし、身を軽くし、老化にも耐えうる

苦菜味苦寒主五藏邪氣厭穀胃痺人服安心益氣聰察少臥輕身耐老一名茶草一名蓬生川谷



日本は中国から茶とその文化を導入し昇華してきた

中国における茶種の変遷の概略

唐 時代 餅茶
『茶経』の中には「粗茶、散茶、末茶、餅茶」の4種類

宋 時代 固形茶(片茶、研膏茶)、散茶
研膏茶は皇帝への献上品、
唐時代の煎茶(煮茶)から、点茶に変化

明 時代 団茶から釜炒り散茶に

清 時代 緑茶(釜炒り散茶)
ウーロン茶(青茶)、紅茶の開発

現在 六大茶種
緑茶、紅茶、白茶、黄茶、青茶、黒茶




中国	漢	南北朝	隋	唐	宋	元	明	清	中華民国
日本	弥生	古墳	飛鳥奈良	平安	鎌倉	室町	安土桃山	江戸	明治大正昭和

唐時代に花開いた茶文化

HPより引用

遣唐僧などにより日本に渡来か?

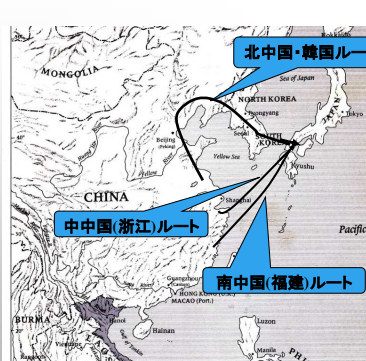
最澄 空海 永忠
唐で流行化していた茶を仏教とともに導入

茶のバイブル
乾燥



唐時代の「茶」は、粉末状にしたものを、主に葱や生薑等と一緒に煮て飲む、「スープのような茶」。陸羽はそれを、「湯の捨て水」として非難し、「茶経」を記し、茶だけで愉しむように提案した。

日本への茶の伝来



北中国・韓国ルート 唐風
固形茶、粉茶の伝来 ⇒ 茶の文化 (A.D.700頃)

中中国ルート 宋風
抹茶法の伝来 ⇒ 抹茶 (A.D.1100頃)

南中国ルート 明風
淹茶の伝来 ⇒ 煎茶 (A.D.1600頃)

中国	漢	南北朝	隋	唐	宋	元	明	清	中華民国
日本	弥生	古墳	飛鳥奈良	平安	鎌倉	室町	安土桃山	江戸	明治大正昭和

奈良時代後半から平安時代初期

遣唐僧(最澄、空海、永忠)により唐風喫茶文化が日本に渡来
文明先進国である唐の文化を貪欲に輸入。憧れの文化

弘仁6年 815
嵯峨天皇、近江の唐(韓)崎に行幸の折、永忠(742-816)が茶を献じる。(日本後紀)

嵯峨天皇は機内および近江、丹波、播磨などの国に茶を植え、毎年これを献ぜしむ

日吉の茶園
最澄が唐から持ち帰った(約1200年前)と言われる日本最古の茶園。

固形茶: 新芽を蒸して固めて乾燥⇒葉研で粉にして⇒熱湯で煎じて、そのまま飲む




中国	漢	南北朝	隋	唐	宋	元	明	清	中華民国
日本	弥生	古墳	飛鳥奈良	平安	鎌倉	室町	安土桃山	江戸	明治大正昭和

宋時代に大きなエポック

空白の時代に突入

唐から宋への過渡期。戦乱の後の安定化までの間は中国との交流が途絶える

国風文化。茶は衰退。お茶への関心が薄れ、わずかに寺院などに伝えられるのみとなった

茶は唐に興り、宋に盛んとなる
内容的にもより精美で多彩になる

宋の登場
新しい喫茶法「抹茶法(点茶法)」を持ち帰る

唐時代: 団茶を葉研で粉末化し、熱湯で煎じて飲む

宋時代: 龍鳳団茶のような固形茶を臼で粉末にし、この抹茶を入れた碗に湯を注ぎ、茶筴で練る点茶法。




中国	漢	南北朝	隋	唐	宋	元	明	清	中華民国
日本	弥生	古墳	飛鳥奈良	平安	鎌倉	室町	安土桃山	江戸	明治大正昭和

喫茶養生記(栄西:1211)

茶者養生之仙藥也、延齡之妙術也




①茶は身体衰弱、意志消沈のときは、氣力を強くする。
②茶は人を愉快な気持ちにさせ、酒の酔いを醒まし、睡気を起こさない。
③茶は小便の通じが良く、喉の渇きをとりさり、消化不良をなくす。
④茶は身を軽くし、脚氣によい。
⑤茶は精神を整え、内臓を和らげ、身体の疲労をやすらかに除く。

佐賀県背振山

日本最初の茶樹栽培地 祈念碑

中国	漢	南北朝	隋	唐	宋	元	明	清	中華民国
日本	弥生	古墳	飛鳥奈良	平安	鎌倉	室町	安土桃山	江戸	明治大正昭和

茶西⇒明恵⇒全国に茶の栽培普及

駒形影園碑

Koma-no-ashikage-en Monument

鎌倉時代の初めごろ、宇治の里人たちが茶の種を蒔き方がわからず困っているとこへ、通りかかった梶尾高山寺の明恵上人が馬を畑に乗り入れ、その跡の跡に種を蒔くように教えたといわれています。



茶西から種子を譲り受けた明恵は梶尾に播種

鎌倉時代には
梶尾茶を第一(本茶)とし、仁和寺、醍醐、宇治、葉室、般若寺、神尾寺のほか大和(室尾)、伊賀(八鳥)、伊勢(河原)、駿河(清見)、武蔵(河越)などが産地

⇒鎌倉：禅院茶礼の普及

貴族、武士、僧侶階級

庶民にも波及

⇒室町：書院の茶の湯

茶の湯の流行

エスカレーター

ギャングル

本来の新しい喫茶法の提唱

やがて日本独自の茶道へと発展

中国	漢	南北朝	隋	唐	宋	元	明	清	中華民国
日本	弥生	古墳	飛鳥奈良	平安	鎌倉	室町	安土桃山	江戸	明治大正昭和

茶の湯の誕生から日本の精神文化に

☆閑茶などによる乱れた茶会
☆唐様の豪華な書院の茶の湯

改革

本来の茶の湯とは

茶道の祖

村田珠光(1423-1502)

博打や飲酒を禁止。豪華な書院の茶を廃し
⇒亭主と客との精神交流を重視。草庵の茶の湯

武野紹鷗(1502-1555)

珠光を引継ぎ、千利休の師。

茶道の大成者

千利休(1522-1591)

わび、さびの茶の湯の大成。

茶のブームは権力者により地方にも広がりを見せる



広がりには上から下にも、しかし高級な茶、茶道具はなし



茶の湯を許され喜ぶ武將
上の好ませ給うもの
下また好む

庶民のお茶
振い茶の文化

中国	漢	南北朝	隋	唐	宋	元	明	清	中華民国
日本	弥生	古墳	飛鳥奈良	平安	鎌倉	室町	安土桃山	江戸	明治大正昭和

中国明～清時代 釜炒り茶全盛

明の時代

茶の大変動時代

貴族と富裕市民に限られていた喫茶習慣が、一般市民へと普及
団茶 ⇒ 団茶禁止令 ⇒ 散茶の本格的生産(蒸製から釜炒り製)



清の時代

中国の茶種や茶具はほぼ完成し、茶文化は最盛期を迎える。
福建省では青茶(烏龍茶)が開発され、その後紅茶が開発される



中国	漢	南北朝	隋	唐	宋	元	明	清	中華民国
日本	弥生	古墳	飛鳥奈良	平安	鎌倉	室町	安土桃山	江戸	明治大正昭和

日本では成熟⇒変化 新しい茶のブーム到来

江戸時代に代わり徳川の治世が続くとともに、茶の栽培は全国に波及し庶民にも手が届くものに変化してきた

権力者のお茶

庶民のお茶

茶の全国への波及とともに多彩なお茶や飲み方などが開発される



宇治抹茶⇒権力者の茶
城下等で茶の栽培



☆地域の風土に密着した番茶の成立
☆釜炒り製法の導入
☆煎じ茶⇒煎茶に
☆覆い下茶(抹茶)⇒玉露に

中国	漢	南北朝	隋	唐	宋	元	明	清	中華民国
日本	弥生	古墳	飛鳥奈良	平安	鎌倉	室町	安土桃山	江戸	明治大正昭和

釜炒り茶の導入と文人茶の成立

抹茶 ⇄ 淹し茶

釜炒り茶(中国、明時代に始まり日本には安土桃山時代末期には伝来)
伝説的には、加藤清正の朝鮮出兵より持ち帰ったものが熊本の青柳茶
朝鮮から佐賀にきた陶工が伝えたものが嬉野茶

隠元禪師(1592-1673)が茶器とともに新しい時代のお茶を伝来

釜炒り茶：新しいお茶。澄んだ水色。喉り茶。仙茶

成熟し、権力的な茶の湯に対する反権力。新しい時代のお茶として
文人たちは清風のお茶に着目

高遊外売茶翁(1675-1763)
～日本に煎茶を普及させた文化人～



中国	漢	南北朝	隋	唐	宋	元	明	清	中華民国
日本	弥生	古墳	飛鳥奈良	平安	鎌倉	室町	安土桃山	江戸	明治大正昭和

煎じ茶 ⇄ 淹し茶

蒸し製煎茶・玉露の創造

お茶の多様化



煎茶の開発(1738)

抹茶とは異なる新しいお茶とその飲み方の創造

庶民は抹茶は飲むことができず、一般には色が赤黒く味も粗末な「煎じ茶」を飲んでいた。

⇒永谷宗円は柔らかい新芽を蒸して揉むことで、味もすぐれた緑の新しい煎茶(淹し茶)を創造(1738)した。⇒煎じ茶から煎茶に

玉露の開発(1835)

「玉露」は、製茶業者山本山の商品名
碾茶製造用の覆い下茶葉を露のように丸く焙り、これが「玉露」の原型となったとも言われ、煎茶と同様に急須で飲めるようになった。



中国	漢	南北朝	隋	唐	宋	元	明	清	中華民国
日本	弥生	古墳	飛鳥奈良	平安	鎌倉	室町	安土桃山	江戸	明治大正昭和

抹茶 VS 煎茶 の文化

茶道の文化

日本の精神文化に

大名・武士のお茶

庶民のお茶

抹茶

煎じ茶

振り茶

成熟し、権力的な茶の湯に対する反権力。新時代のお茶として
清風のお茶に着目

高遊外売茶翁 (1675-1763)
～日本に煎茶を普及させた文化人～

日本における主要な茶の推移

時代とともに煎茶産も大きく変わってきた

茶種の変遷

平安時代	団茶	上流階級
鎌倉時代	抹茶	武士、上流階級
江戸時代	抹茶、煎茶、釜炒り茶	上流階級
	番茶	庶民
明治時代	煎茶、番茶	
	輸出用各種茶	輸出用
現在	機械製煎茶	国内用

☆江戸時代までは権力の庇護のもとに栄えた茶の湯の文化も権力(政府)が変わるとともに衰退
☆輸出茶による産業文化、その後の庶民茶の文化に変化

日本でもお茶は独自の文化を創造した

Discover Japan

茶

一茶 茶筒 茶飯事
茶うけ 茶碗 茶化
す 茶話会 茶菓
茶番 茶色 茶寿
茶堂 海老茶 茶飲
仲間 茶目つけ 浮
世茶屋 目茶目茶
茶托 減茶苦茶 無
茶苦茶 日常茶飯事
茶番劇 茶壺 茶巾
茶目 お茶の子 茶
腹 お茶の間 茶草
筍 茶尻 茶坊主

日本文化には仏教と茶を切り離して語れない

開国に伴う外国貿易の開始

明治初期の茶の種類別輸出量(t)

年次	緑茶	紅茶	磚茶
明治1～5年	7,122		
6～10年	11,273		
11～15年	16,410		
16～20年	18,644	27	14
21～25年	21,395	45	12
26～30年	21,181	35	55
31～35年	18,651	512	337
36～38年	15,577	251	151

大蔵省外国貿易年表

明治期における重要輸出品目の輸出総額に対する割合(%)

茶 生糸 絹織物

中国 日本 輸出 総額

牧之原台地の開墾による茶の増強

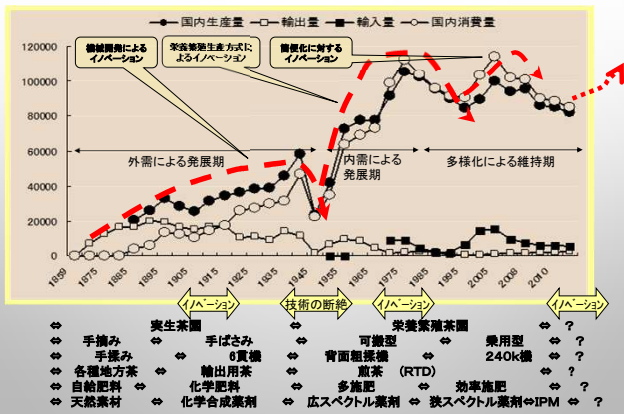
・雇用の創出(水利のない荒廃地に輸出用茶の導入)
・産業の振興(富国強兵策の一環としての茶の導入)

輸出用に各種各様のお茶が生産された

百里園

明治の開化とともに、牧の原台地を初め三方原台地も開墾され、輸出用の茶として緑茶、紅茶、磚茶、ウーロン茶の製造も手がけた。

明治時代に茶業が産業化



明治時代の茶

古くから富士山麓の高冷地を中心に栽培されていた茶も横浜開港により輸出品としての需要の高まりとともに、富士地域全体に茶栽培が増え、販路も拡大していった。



大正時代の茶

- ・1885(明18) 高林、蒸器(2号) 焙茶機(3号)、摩 擦器械(4号)
- ・1908(明41) やぶきた選抜
- ・1915(大4) 茶摘み鉄特許



機械製茶



機械製茶

鉄摘み風景

1850年代には輸出品として高い評価を受けたお茶も、全て手摘み、手揉みのため経費が高むとともに、徐々に製茶機械、茶鉄などが開発されるとともに、機械化へと移行する



茶園の管理



鉄摘み風景

昭和時代の茶

優良品種の導入、機械の大型化が進展。好況時における全国への煎茶の普及。



近代的な茶工場



可搬型鉄摘み風景



富士のやぶきた茶



優良品種の定植



スプリンクラーによる茶園管理

平成時代の茶

機械化は一層進むものの茶業は低迷。需給の歪みを解消し、新需要創出による新しい茶業の模索。世界中に知れ渡っている富士とお茶をセットにブランド化!?



品種茶の導入による茶園の変化

